

次期学習指導要領に向けた検討事項と、今、大切にしたい取組

【検討項目③】 知的障害教育における各教科の目標・内容の構造化・表形式化について —「資質・能力の深まり」と「資質・能力の一体的育成」の可視化—

特別支援学校の現行学習指導要領では、知的障害教育における各教科について、幼・小・中・高等学校との連続性を重視し、次の見直しが行われました。

- ・ 資質・能力の三つの柱に基づく目標・内容の整理
- ・ 中学部に二つの段階を新設、小・中・高等部の各段階に目標を設定、段階ごとの内容を充実
- ・ 特に必要がある場合、個別の指導計画に基づき、相当する学校段階までの小学校等の内容の一部を取り入れることを可能とする旨を規定

これにより、多様な実態の児童生徒に応じた教育課程の編成が可能となりました。

一方で、次のような課題も指摘されています。

- ・ 今後も小・中・高校の教育課程の連続性を重視して育成を目指す資質・能力を整理することとした上で、各段階の内容は、前回改訂と同様に、生活年齢を基盤に、知的能力や適応能力等を踏まえて配列し、より深い理解や学習へと発展させ、学習や生活を質的に高めていくことを原則としてはどうか。
- ・ また、「主体的・対話的で深い学び」の実装に向け、小・中学校等における**高次の資質・能力の構造化**を参考にしながら、知的障害の特性や発達の段階等を十分に踏まえた構造化の在り方を検討してはどうか。

これを受け、知的障害教育における各教科の目標・内容についても、**【高次の資質・能力】**を軸としつつ、個別の「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」の**【深まりの姿】(中核的な概念)**を、どのように整理するかが、次の三つの側面から検討されています。(図1 参照)

- ① 知識の理解も、それが生きて働くように深く学ぶところまでを重視する点(タテの関係①)。
- ② 思考力、判断力、表現力等も、社会や生活で直面する未知の状況でも課題解決につなげていけるよう「質」を高めるところまでを重視する点(タテの関係②)。
- ③ ある程度の知識・技能なしに思考・判断・表現することは難しいし、思考・判断・表現を伴う学習活動なしに、知識の深い理解と技能の確かな定着は難しいので、**【資質・能力の一体的育成】**について重視する点(ヨコの関係)。

タテ①・②は「資質・能力の深まり」、ヨコは「資質・能力の一体的育成」と整理され、これらを可視化するために教科の構造化・形式化(試案)の中では、**【高次の資質・能力】**という項目が導入されています。

【高次の資質・能力】という項目には、知識及び技能を表す**「統合的な理解」**と、思考力、判断力、表現力等を表す**「総合的な発揮」**の二つの観点から構成されます。(図1/表1/表2 参照)

さらに、**【高次の資質・能力】**の示し方については、次の両面から検討が進められています。(表3 参照)

- ・ 小・中・高等部を通して示す方法を基本とする。
- ・ 学部段階によって教科、あるいは教科の内容の構成が変わる場合、教科の特質等に応じて学部ごとに示す方法も可能とする。

こうした可視化により、資質・能力の関係理解が進み、単元づくりを助け、「深い学び」の授業改善につながることを期待されています。

では、こうした審議を踏まえ、今、学校として何を大切にすべきでしょうか。

重要なのは、「道半ば」とあったとおり、知的障害のある子どもたちにとっての各教科での「深い学び」を具体的に捉え、実践を積み重ねていくことです。

田村(2026)は、その鍵となるのが、資質・能力を活用し発揮する「外化」と述べています。

このような視点は、特別支援学校の現行学習指導要領でも示されており、「何ができるようになるか」を重視し、学んだ資質・能力を「生きて働く」ものになるまで高めていく、他の場面へとつなげていく視点をもって「深い学び」の観点からの授業改善を進めていくことが重要になってきます。

小学部・中学部 解説 総則編 (P190) 抜粋

3 育成を目指す資質・能力(第1章第2節の3)

「何を学ぶか」という教育の内容を重視しつつ、児童生徒がその内容を既得の知識及び技能と関連付けながら深く理解し、他の学習や生活の場面でも活用できる「生きて働く知識」となることを含め、その内容を学ぶことで児童生徒が「何ができるようになるか」を併せて重視する必要がある、児童生徒に対してどのような資質・能力の育成を目指すのかを指導のねらいとして設定していくこと。

〈今、重視したい取組〉

- 知的障害のある子どもの学習上の特性を踏まえ、例えば、「深い学び」を次の三つの側面から捉えてみる。
 - 手続き的な資質・能力がつながる深い学び
 - ファスナーの開閉などの操作の習熟により、トイレ動作が遂行できるようになるなど、潜在的な学びをつなぐ学習の過程。
 - 資質・能力が多様な場面とつながる深い学び
 - 数や読み書きなど、授業で学んだ内容が、多様な場面で活用される資質・能力へと変容するまでをつなぐ学習の過程。
 - 資質・能力を発揮して目的や価値、手応えにつながる深い学び
 - 子どもが自ら予測や見通しを立て、主体的に取り組む中で生じる思考をもとに、自分の考えを形成するまでをつなぐ学習の過程。
- 単元を通して、これら深い学びの視点のいずれかから授業改善を図る。
 - 指導計画の展開が、子どもの経験や思考の流れが深まる構成になっているかを重視する。

これらを着実に進めるため、虹の原では、初任者研修や経年研修の研究授業、授業研究会を活用し、「深い学び」の捉え方について教職員で意見交換を行い、実践を積み重ねていきたいと考えています。

「やってみよう」、「もう一度やってみよう」、「最後までやってみよう」
この言葉を大切に、魅力ある虹の原の教育を育んでいきます。

図1

「資質・能力の深まり」(タテ)と「資質・能力の一体的育成」(ヨコ)の関係性を可視化することによる「深い学び」の具現化

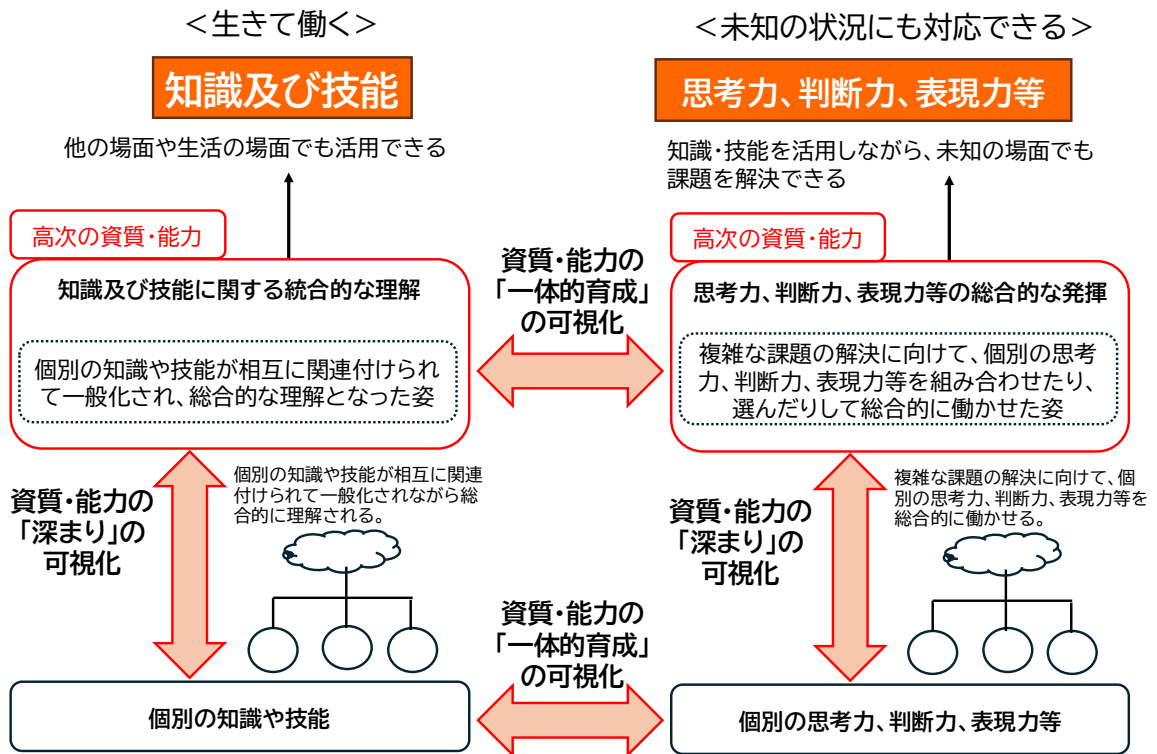


表1 内容の構造化の案／国語／並行パターン

- 国語科は思考力・判断力・表現力等の系統性が明確であり、知識及び技能が全体として思考力・判断力等の深まりを助けることを明確にするとともに、小・中・高等学校との連続性を勘案し、「**並行パターン**」としてはどうか。
- 児童生徒の実態に応じた言語活動を通して、生活に必要な国語を身に付けることが大切であることから、「何のために言葉を使うのか」という視点を明確にし、学習活動の目的を意識できるよう、思考力・判断力・表現力等の内容については、従来の「聞くこと・話すこと／書くこと／読むこと」の領域に加えて、「言葉を使う目的(仮称)」を基に整理してはどうか。

【小学部 聞くこと・話すことの例】

	高次の資質・能力		言葉を使う目的 (仮称)	内容項目例			
	思考力、判断力、表現力等	総合的な発揮		段階			
聞くこと・話すこと		知識及び技能	①各領域の学習の過程で生かし深める側面	総合的な理解	事項のまとめり(仮称)	段階	
	...			情報の伝達			
	...			他者の説得			
	...			情報の獲得 他者の主張の吟味			
	...			合意形成			
	知識及び技能	②各領域の学習を支え文化的な知識や態度、教養として深める側面	総合的な理解	事項のまとめり(仮称)	段階		
			...	言葉の特徴や使い方に関する事項			
			...	情報の扱い方に関する事項			
			...	事項のまとめり(仮称)	段階		
			...	我が国の言語文化に関する事項			

【並行パターンとは】

主に国語科のように、思考力・判断力・表現力等の系統性を重視し、知識・技能が全体として思考力・判断力・表現力等の深まりを助けるような関係を並行的に示す形式。

表2 表形式による構造化/算数科/並列パターン

- 第3回、第4回教育課程部会算数・数学ワーキンググループで提案のとおり、知的障害小学部算数科、中学部及び高等部数学科においても、「並列パターン」としてはどうか。

<理由>

- 算数・数学は知識・技能の内容の系統性が明確であり、内容のまとまりに対応した固有の思考力・判断力・表現力が想定しやすい。(第4回算数・数学ワーキンググループ資料より)
- 知的障害小学部算数科、中学部及び高等部数学科の内容は、小学校とのつながりに留意して構成されていることや、教科の系統性を踏まえ、小学部、中学部、高等部で統一した高次の資質・能力を作成してはどうか。
- その際、小学校算数科における高次の資質・能力を踏まえ作成し、学部段階ごとの留意点等については、各学部段階の学習指導要領解説で丁寧に説明してはどうか。

【小学部 数と式分野の例】

分野		数と式					
		数・量		式		計算	
区分		知識及び技能に関する統合的な理解	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮	知識及び技能に関する統合的な理解	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮	知識及び技能に関する統合的な理解	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮
高次の資質・能力		知識及び技能に関する統合的な理解	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮	知識及び技能に関する統合的な理解	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮	知識及び技能に関する統合的な理解	思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮
	
内容		知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等
小学部	段階						

【並列パターンとは】

主に算数・数学科、社会科のように、知識・技能の系統性を明確にし、思考力・判断力・表現力等と一体的に育成するような関係を並列的に示す形式。

※ 知的障害教育における各教科の二つのパターンに対する確かな理解は、国の説明会を踏まえる。

表3 小・中・高等学校での検討を踏まえた知的障害の教科における構造化・表形式化の方向性

教科	知的障害の教科の方向性		
	表形式のパターン	高次の資質・能力の示し方	
生活	並列	(小学部のみ)	
国語	並行	学部別	学習の対象とする国語の広がりを考慮し、学部ごとに示してはどうか。
社会	並列	学部共通	
算数/数学	並列	学部共通	
理科	並列	学部共通	
音楽	並行	小中と高別	内容の構成の違いを踏まえ、小中と高で示してはどうか。
図工/美術	並行	学部別	図工と美術の違いや、内容の構成の違いを踏まえ、学部ごとに示してはどうか。
体育/保健体育	並列	(体育)小と中高別 (保健)学部共通	「運動遊び」から「運動」への変化などを踏まえ、小と中高で示してはどうか。
職業	並列	学部共通	
家庭	並列	学部共通	
外国語	並行	小と中高別	外国語活動と外国語の違いを踏まえ、小と中高で示してはどうか。

参考/引用文献

- 教育課程部会 特別支援教育ワーキンググループ(第7回)配付資料 文部科学省(令和8年3月)
- 特別支援教育研修 No.825(5月号) 東洋館出版(令和8年5月)